九州 ― 鴻臚館と古代の港湾 ―

大庭　康時（福岡市教育委員会）

西北九州沿海部には、古代・中世に対外貿易の拠点となったとされる港が、点在している。それらは、必ずしも歴史資料的に裏付けられたものばかりではないが、地勢的に見れば、すべての港湾地形にその可能性があるといっても過言ではない。

一方、日本の古代国家は、律令上の公的な貿易窓口として、筑前国博多大津の鴻臚館を経営した。鴻臚館跡では、1987年以来、全容解明のための発掘調査が継続して実施され、多大の成果を上げつつある。ここでは、古代九州を代表する港として、鴻臚館の発掘調査成果を見ることとする。

鴻臚館の立地と調査成果

博多湾は、玄界灘の荒海を海ノ中道と志賀島が遮り、穏やかな内水面を形作っている。鴻臚館はそのほぼ中央、南北に伸びる丘陵の先端に位置する。博多湾に向かっては、ほぼ正面に独立丘である荒津山が隆起し、西側から砂州が伸びていた。これにより、鴻臚館の乗る丘陵と荒津山との間には入江が形成され、樋井川が注いでいた。古代の港は荒津にあったとされるが、この入江の出口付近あるいは荒津山の裾あたりをさすものと思われる。また、鴻臚館の丘陵から東にも砂州が伸び、その南に入江を作っており、港に利用された可能性を考えうる。

発掘調査の結果、鴻臚館は南と北の施設からなり、東西に通る谷（堀）によって隔てられていたことが判明した。7 世紀後半から11世紀前半までの遺構・遺物が検出されているが、後世の削平のため、第Ⅰ期（7 世紀後半）から第Ⅲ期（8 世紀後半～ 9 世紀前半）にかけての建物変遷しか確認できない。11世紀中頃以降は、鴻臚館に関わると推測される遺構は皆無である。この考古学的な状況が、1047年の「大宋商客宿房」放火犯人捕縛の史料に対応するとみれば、この放火による焼失以後、鴻臚館は再建されなかったものと考えられる。11世紀後半は、博多遺跡群で遺構・遺物が急増し、国際貿易の拠点が、鴻臚館から博多に移ったことが看取できる。

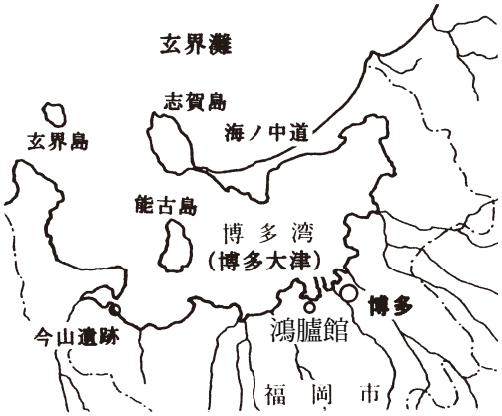
国際港湾としての鴻臚館の機能

鴻臚館には、大きく言って三つの機能があった。迎賓館的機能、入国管理機能、軍事的防衛機能である。外国使節や商人をもてなす場としては迎賓館的な性格がうかがわれるが、この間外国人は自由に館の外に出ることは許されなかったわけで、体よく監視下に置かれたことになる。中国・朝鮮からの来航に際して、その対応の決定権は朝廷にあった。来航者の審査を朝廷で行なう間、乗員と積荷は鴻臚館に収容されたわけだが、遣唐使や遣新羅使、入唐僧などの出国拠点ともなっており、出入国の管理施設として機能した。また、鴻臚館には、兵船・兵士・甲冑・馬が配備されていた。博多警固所は、鴻臚館に置かれたと考えられ、対外的な博多湾の防衛を担っていたのである。

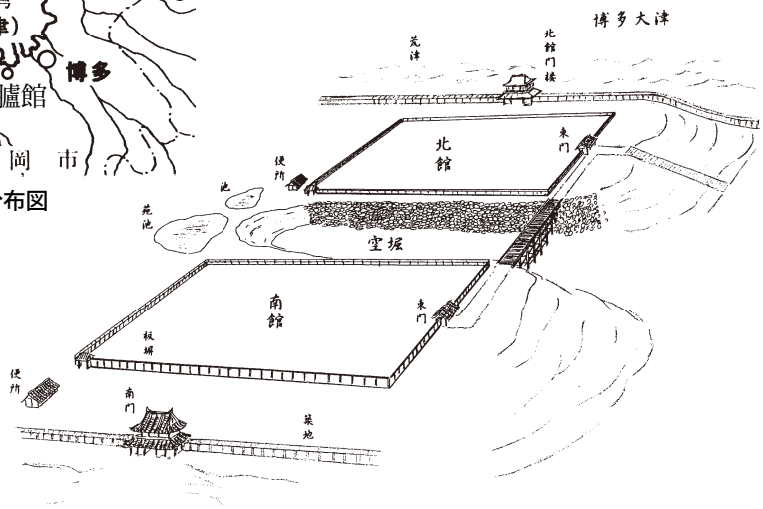
周辺の関連遺跡

博多湾西側の今山遺跡第 8 次調査では、10世紀のドックと推測される遺構が調査された。

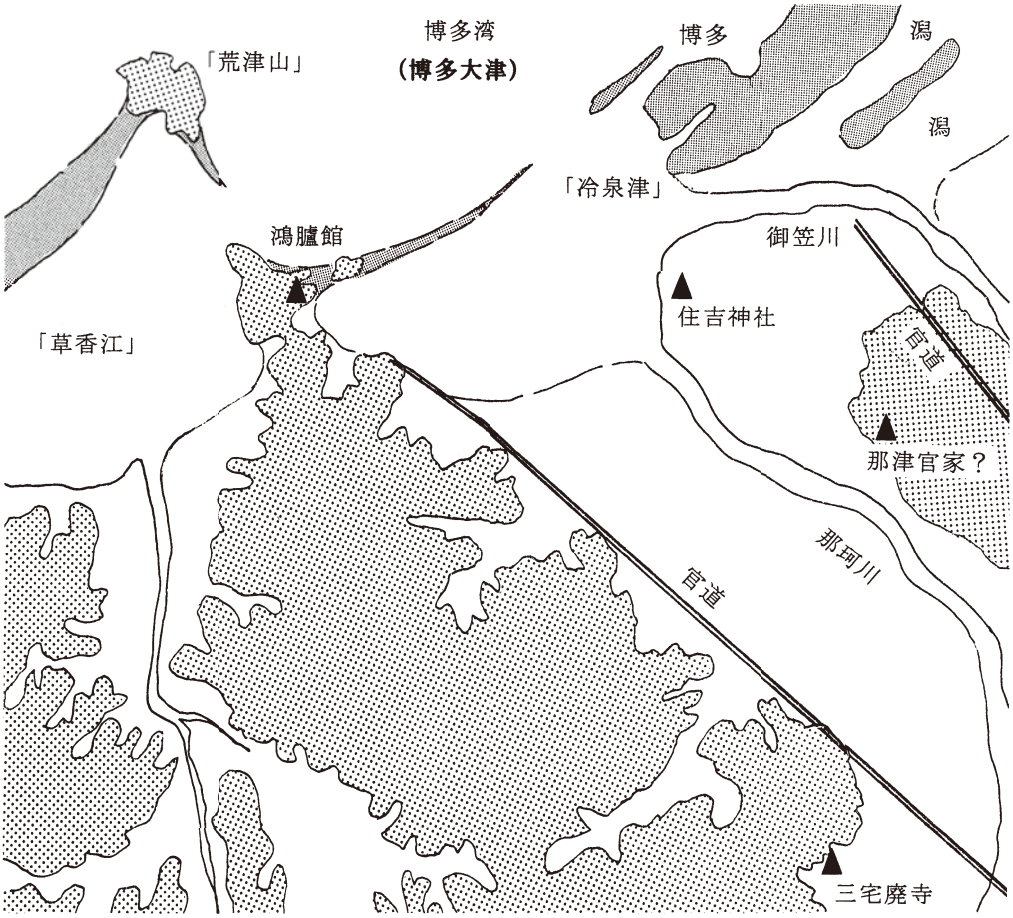
鴻臚館とこれに付随する荒津が外国船に関わるとすれば、国内に向けての港が併置されたとは考えがたい。一方、博多遺跡では史料上不明であるが、8 世紀以降官衙が置かれた様相がみられ、博多が鴻臚館と対になる国内向け港湾であった可能性が考えられる。



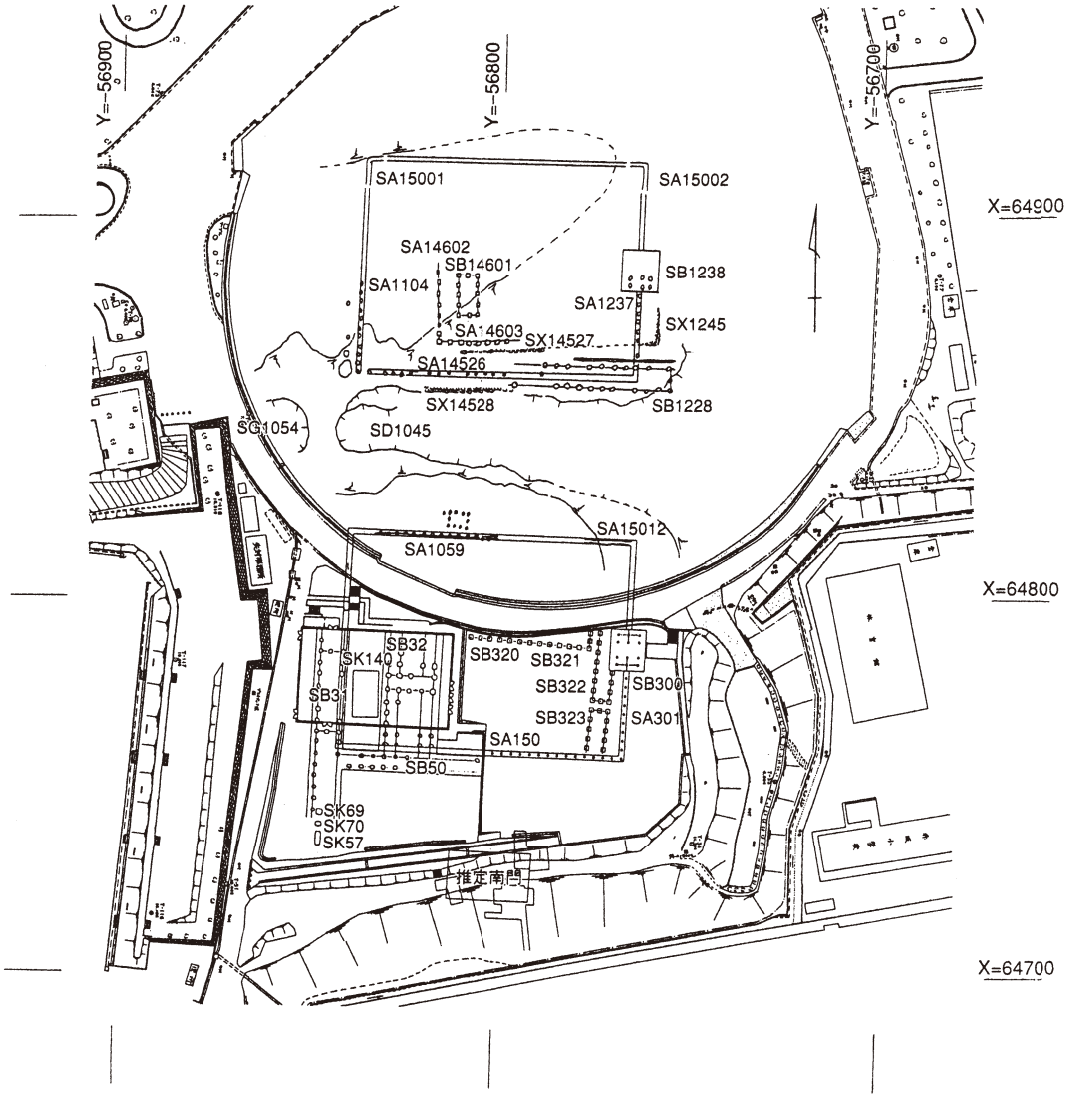
鴻臚館周辺遺跡分布図



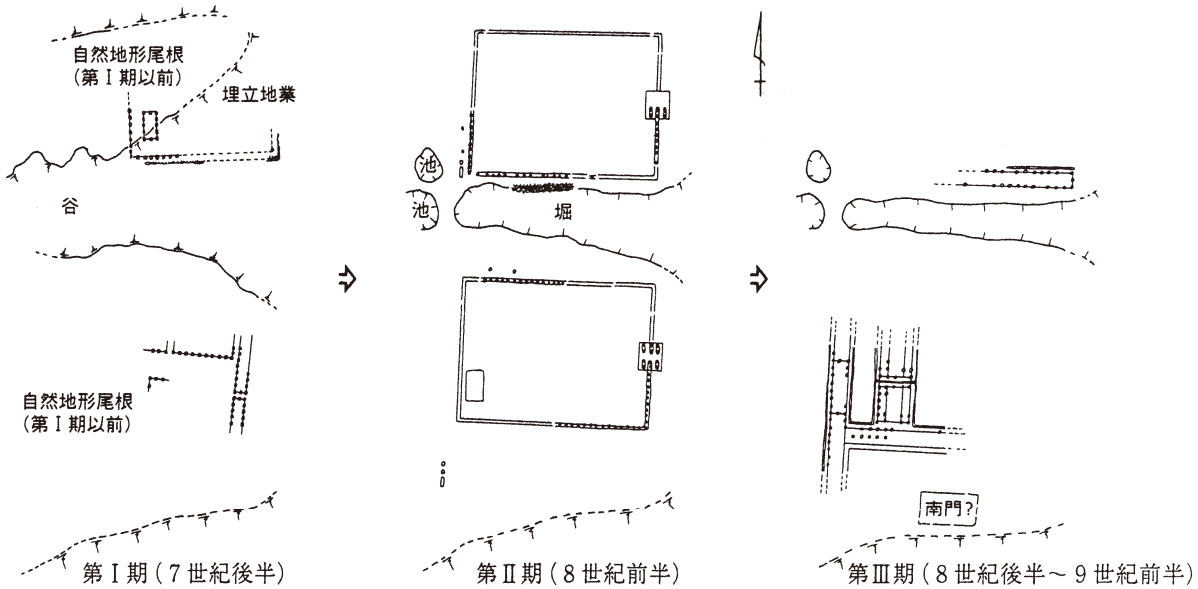
筑紫館（鴻臚館）調査から見た想定復原図



鴻臚館周辺旧地形推定復原図（明治33年地形図による）



鴻臚館跡検出遺構概念図（S＝1／2,000）



鴻臚館跡建物遺構変遷図